

# 高津の「自由と創造」を守りたい 額田アッピール

わが 5 期同窓会の会長 額田晃作氏が、現役校長と同窓会長へめずらしいアッピール文を届けられました。山本健太郎氏の解説とともに そのいきさつをお伝えします。

発端は今年六月二十三日の毎日新聞夕刊に掲載の川平家物語でした。川平家は高津とは何の関係ありません、沖縄琉球王朝の伝統貴族です。その末裔で、放送事業で成功された川平朝清(かびら ちょうせい)さん、92 歳。昭和女子大学名誉教授の物語、この回は台湾で素晴らしい教育を受けて人格が形成されたことをふり返っている記事でした。

毎日新聞 2021年(令和3年)6月23日(水)夕刊 文化 2

## 自由や自主性育んだ校風

### 沖縄、台湾をつむぐ

川平家物語

川平朝清さん(92)が多かったようだ。通った日本統治時代の台北高等學校(台湾)は「自由と自治を尊ぶ」校風で、生徒たちは上下の隔てなく「君」付けで呼び合った。38校あった旧制高校の一つで、珍しい中高一貫7年制(専修科4年、高専科3年)の男子校だった。教える側も一斉に欧米留学を経験した教授もいた。個性的な面々が

「よし教えてやる」。

夏休みに、学校のプールでトウチャー先生による特別が始まった。平泳ぎにクロール、バタフライ、背泳ぎ……。ひと夏みっちり仕込まれた。

夏休み明け、水泳のりレー選手を選手タイムトライアルが行われ、朝清さんはクロールでメソバ1になった。「逃げない生徒に『自分で練習しておけ』とは言わず、できるまで教えてくれる。スバル多でしたが、思いやりがありました。そういうところが専科らしかった」と懐かしむ。

生物の川平朝清教授も忘れられない。学生寮の舎監を務め、夫妻で生徒たちの面倒を看いた。「怒ったことなど見たことない」。あだ名は「オチャカオ」。魚を想像してつけられたらしい。

朝清さんは7年生の夏休みに、蜂の採集に挑んだ。チョウでは専門家の域に達していた級友になわなれと思っただけから、荒川教授は「蜂を採集したのは君が初めてだ」と喜び、蜂の生態などを熱心に教えてくれた。何度も蜂に刺されたので注意はされたが、やめるとは言われなかった。「家にあったんごう薬を塗っただけで不思議と大事にならなかつたですね」。生徒の自主性を重んじる風風が校内にあふれていた。

■ ■ ■

図書の塩月柳津教授は自由奔放で強烈な印象を放っていた。台湾美術界をけん引する画家で、白

高でも教えた。朝清さんがシュールレアリスムのような画風で描いた水彩画を提出した時だ。似たこの絵は、塩月教授は激賞。水を付けた絵筆で朝清さんのほおをべたべたとぬらした。「文句があるならまじんと言葉で言えばいいのに」とムツとしました。

4年生のとき、塩月教授は美術講義を講くまう生徒たちに勧めた。文化・芸術でもよいとされたので、朝清さんは「沖縄の民謡をテーマにした。長兄・朝申さんが持っていた知識文化の書を読んで研究し、沖縄の琉歌や歌舞劇「組踊」、八重山の民謡などをまとめた。沖縄の名所旧跡などを描いて盛り込み、気づけば400字詰め原稿用紙で1300枚も書いた。「表紙は紅葉がいいわね」。母・ツルさんが、沖縄から伝統技法の紅型で染められた布を取り寄せた。提出した論文に塩月教授は、琉球古典の馬を描いて返してくれた。「受験がないと資料だからそ打ち込みました。16歳で論文をまとめる上回る機会を作ってくれた先生には感謝ですわ」と語る。「鈴木公一」

■ 次回は7月7日掲載

もっとアッピール

山平朝清さん(92)が書いた「沖縄の歴史」。塩月柳津教授は琉球古典の馬を描いて返した。いすれも鈴木公一

額田晃作氏がこれを読んでいるとき、この台北高等学校の校風が、高津の伝統「自由と創造」にあまりに似ていることに気づかれました。額田氏は不思議に思い、母校史をよみなおしたところ、まさしく高津中学の初代校長 三沢 糾氏が、台北高等学校初代校長に赴任しておられたことを確認されたのです。記事には三沢 糾校長の名前は全く出てこないで、額田さんの大発見だったのです。この記事にあるように自由と創造の校風教育が、いかに人材育成に寄与してきたかを示しているモデルだと確信された額田氏が、現役の高津校長、同窓会長あてに アッピールを出す決意をされたのです。アッピール文は次の通りです。

なお文末に高津六十年史の中より 創立当時大正 7 年より昭和のはじめまでの記事のコピーを添付します。

## アツピール文

大阪府立高津高校 校長 殿

大阪府立高津高校 同窓会会長 殿

突然ではありますが

高校五期 額田晃作と申します。

十年母校の歯科校医の任にあり、高津方式歯科検診を口腔衛生学会で発表

父収吉は中学 2 期生で武田長兵衛氏を同窓会会長にお願いし副会長を務めてまいりました。私は父没後武田会長より田中太郎氏に至るまで高津同窓会の一翼を担わして頂きました。

二代会長 坂本氏を選挙で選ぶ、群芳を編纂し校史を織込む、民間校長の伝統破壊を防ぐその他思えば余にも多い出来事がありました、しかし高津の「自由と創造」を守りたい一心で対処し他の副会長も母校の為一生懸命にやってくれました。

さる六月二十三日毎日新聞夕刊文化欄に川平家物語を鈴木玲子を書いておられ。これはまさに高津初代校長三沢糾イズムではないかと気づき。60 年史をひもとくとずばり父が云っていたように台北高等学校へ転任されそこでも三沢教育を教師。生徒に浸透されていたことが明らかになりました。

先生の胸像は母校玄関に私がお願いして設置しました。

高津が受験成績で優劣を付けるだけでなく人間形成を重んじる教育を現在においても自信をもって貫いて頂きたいと存じます。

高津が一時期美術において全国制覇八回したのは卒業生の伝統の構築、先生の自由な熱い指導あつての事で、現在の芸術教育無視は高津教育の衰退を放置されていると感じ母校を誇りに思えない残念さがあります。

# 高津 60 年 史

## ● 高津中学校時代 ●

大正 7 年(1918)

高津中学の誕生  
北野の地で開校

「大正 7 年 3 月 25 日、文部省告示第 38 号を以て、大阪府立第 11 中学校を大阪市に設置し、4 月より開校の件許可」

こうして、わが高津中学は、呱呱の声をあげた。初代校長は三沢糾(ただす)先生。同年 4 月 6 日、北野中学校をかりて、179 名の入学式を挙行(受験者は 400 名もあった)、北区の北野茶屋町、私立心華(しんげ)小学校を仮校舎として、授業が開始された。

大正 8 年(創立 1 年)

高津の地に移る



初代三沢校長

翌 8 年、「3 月 28 日、文部省告示第 70 号を以て、大阪府立高津校と改称の件許可」せられ、4 月、東区高津北の町に、木造二階建て本館一棟が落成し、移転した。その建坪は、わずかに 2,833㎡、校地 23,636㎡にすぎなかった。

心華小学校時代には、毎週水曜の午後は、校長以下全員が駆足をした。十三大橋から長柄大橋を渡り、対岸を西へ向かい、十三大橋に戻るという、約 7 km のコースで、服装はシャツ 1 枚にパンツ、地下足袋といった姿で、変った眺めだったという。

小学校から高津へ移転の時は、皆が時計やらガラス瓶だのを、風呂敷に包んで運んだものだが、その当時は、高津辺には、桃畑や桑畑があり、谷になった所には灌漑用水の味原地があって、全くの田舎の様子だったそうである。

初代校長三沢先生は、和歌山県立海草中学校長から転じて来られたのであるが、先生の教育方針は、自由主義的な思潮の盛んになってきた大正時代を背景として、生き生きとはばたいた。

時代背景

学校の創立せられた大正 7 年には、全国的に米騒動がおこり、シベリア出兵も行なわれたが、第 1 次世界大戦が終ったあと、次第に資本主義が発達するとともに、自由主義デモクラシーが発達してきた。また文芸方面でも、白樺派の活躍があり、人道主義的な思想が高まって来た。こうした時代を背景に、三沢先生は、「自由の善用」と「人格の尊重」を説かれたのである。このことは、「校報」第 1 号に載っている、第 1 期卒業生への卒業式の訓辞に述べられているが、この自由と創造の精神は、本校の教育精神に、強固な礎(いしずえ)を築かれたのであった。

学校の状況

この中学は、最初から他校と違ったいろいろの特色を持っていた。制服は、大阪の中学の、冬は黒、夏は白、に対して、当校は冬は紺、夏は霜降り。帽子は、よそは皆白線を巻いているが、白線はなし。他校の海軍式の脚絆風ではなくて、陸軍式の巻きゲートル、というように、当時としてはモダンな感じであった。

三沢校長は、いろいろ新しいことをせられたが、入学試験に、いわゆるメンタルテスト式の出題をされ、また、当時としては中学校には珍しい女の先生を採用せられたりした。創立わずか数年で、高津は全国的に有名になり、新教育の高津を見ようとして、全国から多くの参観人が訪れたということである。

3月、新校舎の落成式が行なわれた。

ところが、8月の夏休み中に、夕方出火して（原因は放火）、本館の一部、特別教室、生徒便所等を焼失した。

3月、第1期卒業生が誕生した。179名の入学者中、転退学者、4年で旧制高等学校に進学した者たちを除いて、卒業生は84名であった。この卒業式における三沢校長の訓辞は、この中に、いわゆる校風ともいうべき「自由と創造」の精神が述べられていて、意義深いものである。第1期生の方が印刷したものがあるのでそれを座談会（その1）の後に掲げておく。

この年4月、前年焼失した校舎の復旧工事が完成した。鉄筋コンクリート三階建て（現在の北館）は、府下で学校校舎としての初めてのものではあった。

4月、三沢校長は、台北高等学校校長に転ぜられ、第二代校長として、愛知一中校長として敏腕を振るっておられた羽生隆先生が着任せられた。これは、三沢先生が直接羽生先生を尋ねて勧誘せられた結果だそうである。

羽生先生は、三沢先生の創業の後を受けて、いわば、守成の業を大完せられたのであった。

先生のなされたことの一つに、運動部の対外試合禁止がある。先生は、選手制度は全校生徒の向上にはならないとして、対外試合を禁止し、代りに、週1回、全校生徒が、自分の好きな運動をする、先生も一緒になってやるということを行なされた。

また、能力別の組み編成をせられたが、これはやはり、長所短所の両面があって、短い期間で止められたそうである。

12月25日、大正天皇崩御、昭和と改元せられた。

大正9年(1920)(創立2年)

大正10年(創立3年)

大正11年(創立4年)

大正12年(創立5年)

中学卒業1期

「自由と創造」

大正13年(創立6年)

中学2期

大正14年(創立7年)

中学3期

第2代羽生校長



大正15年(1926)(創立8

昭和元年

中学4期